



別大周辺を歩く ー地域社会学授業報告 Iー

別府大学文学部教授 富吉 素子

I. はじめに

別府大学の講義科目の一つに地域社会学という科目がある。この科目は従来、農村社会学と都市社会学において研究されてきた分野であったが、わが国の全体的都市化に伴って農村と都市を区分することができなくなった状況から生まれてきた、新しい学問である。

筆者はこの学問の概説を行った後、学生による授業作りを取り入れることとした。それは一つには別府大学が地域に根ざした活動を重要視しており、地域に開かれ、貢献できる学園を目指しているためであり、二つには教師と学生が地域社会に学問の目を向け、地域の現実の生活から新しい学問をともに作り出すことを目指しているからである。¹⁾

II. フィールド作業の経過

授業の一環としての地域社会研究を考慮して、初年度の今回は、別府大学周辺を知ることから始めることとした。別府大学周辺にフィールドを限定すること以外は、フィールド調査の目的の設定や方法を教師側からは行わず、まずは、大学の門を出て、周辺を歩いてみることから始めた。その際、A2サイズの地図を各人に配布し、歩いた道順の記入と、発見事項、観察事項の地点をポイントしてもらった。

夏休み前の授業経過として、第一段階は6月中旬の「初歩き」と、そのときの発見事項、問題点などの個人別レポート作成と提出。そして、このすべてのレポートを読み、状況報告するスタッフの募集と確定を行った。約10名の学生が研究スタッフとなった。第二段階は、6月中旬～下旬に行われた研究スタッフによる報告準備作業であった。昼休み・放課後を利用したり、時間の不足は自宅に持ち帰り、個々人のレポートに目を通し、各人が歩いた道路を四つの区域に分類した。そしてさらにそれを内容別に分類して、授業時の発表の方法を討論、その方法に基いて発表の準備が行われた。第三段階は、6月下旬におこなわれた授業時における全体発表で、約10名のスタッフ(4グループ)が順番に教壇に立った。黒板に貼られた大地図を指示棒で指しながら、マイクで説明を行った。「受講者」の学生たちは、真剣に発表者の内容に聞き入り、自分自身が書いたレポートの内容と照らし合わせながら、あるいは、メンバーの発見や問題意識、また解決策について耳を傾け、メモをとったりしていた。²⁾、³⁾の私語を除き、ほとんどの者は熱心に集中していた。約60分間の

¹⁾ 学校法人地域社会センター『地域社会研究』第1号 1999年 p1

発表の後、全員は事前に言い渡されていた今回の発表に対する感想と意見を用紙に記し、提出した。

Ⅲ. 大学周辺の概況

提出レポートによれば、別府大学周辺はさまざまな問題を有することが判明した。これは、地域の道路を歩いた限りでの問題点の指摘である。そして、大学周辺に住む学生からは、住民としての視点から、評価すべき点の指摘もあった。この節では、大学通り、学生街、住宅地、商店街、昔の農家の名残など多様な面を持つ別大周辺について、学生が観察した結果をまとめてみた。

(1) 道路があぶない

まず、大学正門前からJR別府大学駅までの道路について述べてみることにする。この道路についての大半の学生の感想は、「毎日、危険を感じています。」や、「いつ事故が起きてもおかしくない」状況である。特に、そう感じる時間帯は朝夕の通学の時間帯であるという。また、このメイン道路および別大下通り（旧道）について述べてみると、道路幅が狭く、歩道が整備されていないところが多い。それにもかかわらず、両道とも旧本道であるため車の交通量が非常に多い。舗装改修工事が部分的に行われ、つぎはぎ状でこぼこになっている。また、段差などが多く歩きにくい。高齢者や身障者には特に歩きにくい道路である。また、別府市全体がそうであるが、大学周辺の道路も坂道であり、上述の道路幅の狭さもあり、通学時間帯はかなりハードな道路である。また雨天時は、坂道がすべりやすく、雨の排水設備の問題が生じている。夜間は街灯が少なく、道路のデコボコが見えないため、歩行者やバイクが通行ないし走行しにくい。つまずきそうになったり、バイクが転倒しそうになったりしたケースもある。次に、人為的な問題としては路上駐車が多く、交通の障害となっている。車が車庫からはみだして交通の障害となっているケースもある。また駐車中の車による見通しの悪さも気分的なイライラにつながっている。さらに車やバイクが道路が狭いにもかかわらず、スピードを出して走るのが問題である。

メイン通りに関するこれらの諸問題に対してさまざまな解決案が提示された。まずより根本的な対策としては、区画整備、道路の拡張、歩道の確保、電柱の地下埋設、カーブミラーや交通標識の設置などである。これにより学生はもちろんのこと、住民の方々、中でも高齢者や身障者にとってはバリアフリーが確保され、小学生や幼稚園生にとっても安全な通学、通園道路が約束されることになるのではないか、と思われる。

これらの案に対し、現実的な案としては、道路の両側には多くの商店や住宅があることを考慮すれば、大々的な拡張工事は困難であるから、せめて歩行者の安全のためのガードレールを設置したい（それにより道路幅が狭くなるため反対であるという意見もある）。また、狭い道路を大型バスが通り、歩行者は危険なので、バスを小型化してはどうか。路上

駐車をなくし、交通マナー・アップ運動などにより、自分たちのできることからやっていけばよいというものであった。また子供たちを守るためにすぐできることとして、地域の人々・PTAの人々による交通当番などが提唱された。

メイン道路に関する学生たちの感想・意見はおおよそ上記のようなものであった。筆者も道路の状況を同様に感じてはいたが、朝夕の通学時間帯のラッシュ時に歩き合わせたことがなかったので、そこまで、学生たちが危険さ、不便さ、歩きづらさを感じているとは思わなかった。確かに、ラッシュ時以外の時間帯に歩いてすら、「イヤな」道路の印象をめぐえなかったのであるから、さもありませんと思われる。

メイン道路からはずれた小さな道路、細い道路に関しては、舗装状況の悪いところもあり、歩きづらい。しかも迷路のようになっているところもあり、初めての者には、目的の場所・家などが探しにくいので、住居表示板などがあればよいのではないか。さらに細く入り組んだ道は、消防車や救急車が入れないので、もしものときは大変である。メイン道路のところではカーブミラーの必要性が指摘されたが、細い道どうしの交叉点にもマジックミラーなどの設置があればより安全な通行・走行が可能となるであろう。

道路に関しては、ほぼ 100%の者が道路幅の狭さ、舗装の不完全さ、歩道のないこと、段差が多いことなどをあげていたが、別府市出身者はどうみているのだろうか。

ある学生は、「どの発表も、『うんうん』とうなずけるものだった。今回の学外調査は大学周辺の一部で、私の家の周りにも問題点がたくさんある。別府は道が狭いので有名。私の家の周りの道も狭く、見通しが悪い。車も一台通るのが精一杯で、対向車が来るとどちらか一方の車が広い場所まで戻らないといけない。その道路は小学生の通学路でもあるので子供がいつ飛び出してくるかかわからない。車が通るときには、運転者が十分に注意しなければならぬ」と書いている。道路の狭さに閉口している様子がうかがわれ、現状では事故など起こらないように「十分注意しなければならぬ」と、運転者を戒めている。

その他、県内の他町出身者（狭間町）は「以前は自分の町も交通の不便な道路がいっぱいであったが、今は少しずつ道路が拡張されていっている」と述べ、「しかし、別大通りについては、道路沿いに商店・民家が建てこんでいるため難しい問題だ」としている。

(2)「公園」がほしい

別大周辺には公園が少なく、あっても、規模が小さく、トイレも、ごみ箱もない、という指摘があった。住民のなかには高齢者が多いようであるし、幼児の遊び場所をもっと確保すべきであろう。「住みやすい町」づくりのためには、このような身近な問題から解決していくべきであろう、とある学生は書いている。一方、ある公園では、毎朝、掃除をしているおじいさんがいて、「公園はきれいである」と観察していて、「みなもゴミを捨てないようにしよう」と呼びかけている。

(3) 温泉が豊か

普段は気づかないが、歩いてみると、予想以上に温泉が多い、という者がいる。確かに電車通学をしていてJR別大駅と大学正門までを往復するだけであれば、温泉の存在に気づくチャンスが少ないかもしれない。しかし、今回のように少し横道に入ると、側溝からは湯煙が立ち上っているし、次のような発見もある。つまり、1階は温泉の銭湯であり、2階はその地区の公民館になっている。「湯の町別府ならではの、温泉を利用した交流の場になっている」のである。「裸のつきあいは別府など温泉地特有で、お風呂にはいるだけでも交流が深まる」と感じている。この公共の場をよりよく交流の場にするという発想は、他地域で、小中学校などの公共の場を避難場所として指定しているところがあるが、それ以外にも交流の場として利用してはどうかという意見の者もあり、それへの賛同者もいた。

(4) 環境はのどか

(1)の道路の項で、狭い、デコボコ舗装、歩道がない、夜は暗いなどを指摘したが、地元出身者の学生は、そういうことについては「いろいろと当たり前とってきた。道が狭く、危険であっても、子供も老人も普通に歩いてきた。別府は、老人にとっても、のどかで、とても住みやすいところと思う。私も自分の地域はとても好きです。だから、今ののどかな場所であってほしいと思っています。」と述べている。昔からの居住者には狭い道路も苦痛ではないのかもしれない。

裏道を歩いていたある学生は、ふっと後ろを振り返ると、別府湾がきれいに潮の流れまで見え、すがすがしかった」と述べていて、景観のすばらしさに高い評価を示している。また、「悪い点は多々あるが、自然が多く、温泉もあり、住みやすいところである」と述べていて、総じて、海や山、温泉地のよさと利点を忘れずに捉えている。そういう地理的な環境のよさを認めつつ、たとえば、「別府には別府リハビリセンターなどがあり、治療を目的としている人がいっぱいいます。そういった人々の身体にやさしい町作りを行政に訴えたい」という要望や、「障害をもった方々が自由に歩けない町や、特定の施設内でしか行動できない町などは遅れていると言わざるをえない。高齢社会の深化にも備えて、考えていくべきである」など、住宅地としての地域性へのこころ配りがみられる。そして「観光地なのだから、もう少し便利なまちづくりをするべきである」などの提案も多くあり、個々人が大学周辺に抱いている心情が予想外に厳しいものであることがわかった。

しかし、大学通り全体をながめると、いろいろな商店、コンビニ、スーパー、書店、銀行、郵便局、公衆電話があり、住みやすい環境ではないかというものもある。

裏通りの住宅地を歩いてみて、住宅地のなかにスーパーやコンビニ、商店がないことに気づき、お年寄りの人たちは買い物をごどのようにしているのか、と気遣う者もいる。たしかに鉄輪、春木、上人仲町まで行けばスーパーはあるが、桜ヶ丘や北石垣にはそれらは見られない。コンビニでは生鮮食品は購入できないので、住民、とくに車などの足のない人々にとっては不便であろうことが推察される。

つぎに、ゴミの問題について述べてみたい。ゴミについては、指定日に持ち出される可燃物と不燃物の問題と、道路上に投げ捨てられるゴミの問題がある。両方の問題について共に学生の記述が多かった。指定日の可燃物（生ゴミ）のゴミ出しについては、歩道や路上に長時間置かれていることが多く、人や車は通りにくい。また、収集時間が遅いときは、カラスや猫の被害に遭うことも多く、夏場などはとくに衛生的によくないといった記述が多かった。まれに、金網で囲ったゴミ捨て場があり、なかでも天井にまで金網が張られているものについては、観察者はその念の入れように驚いたという。

町を美しくするためには、ゴミの収集日を厳守すること、可燃物と不燃物をしっかり分別すること、捨てる場所を厳守することなど、自治体に責任を押し付けるのではなく、一人一人が自覚するべきであるなどの、自覚を促す提案もあった。ゴミの収集については、他地域の各自治体でさまざまな方法が採られているので、参考にするとよいと思われる。

路上のポイ捨ての問題については、記述した何人かが、別大生がポイ捨てをやめれば大学通りは美しくなるとしている。これは由々しき問題である。学生のなかからこういう意見が出るのは、おそらくポイ捨てを目撃してのことであろうから、事実はどうなのか、調査の必要があると思われる。

（５）コミュニケーションが、「いい」

前項で「別府はのどかで住みやすい」という意見があった。学生の目には、住民どうしのコミュニケーションはどう映ったのであろうか。例えば、細い入り組んだ道路の奥にある住宅は、「お隣り」どうしが近いため、近所付き合いがしやすいとみている。また、昔からの家が多いため地域の絆が強いともみている。具体的には挨拶をすれば、どの人も笑顔で応えてくれるし、ある学生は、朝、大学に来るとき、近所のおばあさんたちや駅の人々もやさしく挨拶してくれるという。人情味があって生活しやすいと感じている。

大学周辺を歩いたあるグループは、道路沿いにお地藏さんが1体、少し離れて7体位あるのを見つけた。歩いていた人に尋ねると、そのことについては、この先の〇〇さんが詳しいと教えてくれたので、そちらのお宅を訪ねた。〇〇さんはお地藏さんを立てたいきさつを詳しく説明してくれたという。この〇〇さんを紹介してくれた人、そして詳しく教えてくれた〇〇さんに対して、グループのメンバーは、都会にはないご近所付き合いが地域の人たちにあったと感じている。さらに、この地域には今なお「おせったい」という行事が続いていて、近所付き合いがすたれることなく大事に保存されていると観察している。

このような地域内の交流、人付き合いがあるため、道路や住環境にさまざまな問題がある割には、住民どうしのトラブルもなさそう、と推察している。

IV. 後期への抱負

Ⅲでは学生が発見し、観察した結果の概略を述べた。後期の授業においては、この中で

捉えたテーマを各人が一つ決め、資料や書物による町の歴史の調査、民家や商店のフィールド調査、あるいは、役所や施設（学校、公民館、お寺、保育園）におけるインタビュー調査など個性に応じた研究と作業が待っている。

夏休み前の段階での学生のテーマをいくつか拾ってみた。

- 道路環境やバリアフリーの問題についてより深く調べてみたい。
- 道路環境の悪さが地域住民にどのような影響を与えているか、高齢者から幼児まで年代別に調べてみたい。
- 住み出してももたない自分たち（学生）と、居住暦数十年の住民の道路環境に対する感覚の違いを調査したい。
- 別府大学ができたことにより、住民の方たちのモラルや地域の環境がどのように変わったか、また、別大生に対する印象を調べてみたい
- 高齢者、障害者にスポットを当て、バリアフリーの現状・必要性・今後の展望について調べたい。
- 地域の付き合い・つながりの深さについて調べたい。
- 地域の歴史と、ふるさとの自分の地域とを比較研究したい。
- 「鬼の岩屋古墳」や「おせったい」、地域の建物の歴史の変遷について調べたい。
- 「町」というのは、一般的にいかなる形成過程をたどるのかを、この町で検証したい。

V. おわりに

「地域社会学」を実践するために、まずは、地域を歩いてみよう、と別大周辺を全員が歩いてみた。「歩き」後のレポートの中で圧倒的に多かったのが道路環境に対する感想や意見であった。日々通学しているときの感想とも重なり多くの発見、意見が寄せられた。別大通りについてみれば、かくも学生が通学時に不安感と危機感をもって歩いていたのかということである。教員は車での通勤が多く、歩行者としての意識や感想が学生ほどにはないのではないかとわが身をも振り返って思ったことである。道路環境について繰り返して述べたのは、そのことを強調したかったためでもある。

道路環境への厳しい目は、高齢者・障害者・子供たちへの優しいまなざしとなり、バリアフリーの問題へと発展していった。この問題を掘り下げることにより、地域の人々と交流し、その相互の対話の中から地域の人々と人間関係が生まれることを期待することも可能である。別大周辺の地域の人々との間に強い人間関係が生まれれば、特に、遠隔地から来ている学生にとっては、卒業後もなつかしい土地として思い出されたり、戻ってきたときには、そこを訪問するということが出てくるにちがいない。

「歩き」の中から観察しえたのは、屋外の道路や公園、温泉そして公民館などであったが、後期の「歩き」においては、一歩進んで、地域の方々の御宅を訪問し、インタビューによりさまざまなテーマについて学んでいこうと思っている。その対話の中から、学生の研究テーマが見つかり、人生の出会いなどがあればこの上もないことと思われる。